

月刊

みんぱく

◎ 国立民族学博物館

2009

8

月号

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283
平成21年8月1日発行 第33巻第8号通巻第383号



特集

旅する神がみ



日本の文化展示・祇園祭の幣(右上隅)



アメリカ展示・ペルーの興とマリア像

日本の文化展示・弘前ねぶたの見送り



特集

旅する神がみ

飾りたてた神輿に乗り、華やかな儀式をともなう神もあれば、闇夜に密やかに御旅所に出立する神もいる。旅先で歌舞音楽を楽しむ神もいれば、人びとの祈願に応える機会とする神もいる。それぞれの神さまの旅心はいかようなものだろうか



南アジア展示・パールツサラーティ寺院の山車



『春日若宮御祭礼絵巻物』上巻 遷幸儀(江戸時代中期)〈春日大社提供〉

中牧弘允

なかまき ひろちか
民博 民族文化研究部

専攻は宗教学、経営人類学。善光寺のお膝元で育ち、日本の宗教を国内のみならず、ハワイ、カリフォルニア、ブラジルなど海外にまで追いかけている。

八月は民族大移動の季節である。お盆の帰省だけではない。東北三大祭もあれば、海外旅行もさかんだ。そして人びとが動くとき、ご先祖や神がみもまた移動する。

旅する神

日本の神がみは神殿に鎮座しているだけではない。時に神輿に乗って人間界に旅をする。祭りともなればお旅所がもうつけられ、神社から神がみの御神幸がおこなわれる。御神体が隠されたまま移動するのである。他方、インドでも山車に乗ってヒンドゥーの神像が巡行する。カトリックの祭礼でもマリア像や聖人像が輿に乗せられ、行列を組んで教区をめぐる。だが、秘匿されることはない。

旅する仏

神だけでなく仏も旅をする。仏像はふつう寺院に安置されているが、江戸時代に盛んだった善光寺(長野市)の出開帳のように各地に出張することもある。じつは、旅に出るのは秘仏の本尊ではなく、その前に立つ「前立本尊」である。そもそも、秘仏といかんがえかたは仏教の本来の教義にはなく、むしろ神道の御神体の伝統に根ざしているとの指摘がある。

『善光寺縁起』によれば、本尊自体も百済から日本に渡来し、難波の堀から元善光寺(飯田市)を経て現在の地に安住した。ところが、戦国時代に



日本の文化展示・春日若宮御祭(おんまつり)の田楽柴

動させられた。そして信長が本能寺の変にあうと、尾張の清洲に移転され、さらに家康によって浜松を経て甲府に戻された。やがて秀吉が天下統一を果たし、京都の大仏殿が地震で崩壊すると、甲府から京都に迎え入れられた。しかし、秀吉の体調が悪くなると善光寺如来のたたりではないかと噂され、秀吉の死の前日、信州に送り返されたという。戦乱の時代、秘仏は流浪の日々を送っていたのである。

神仏と人びとの移動

日本の文化や歴史に潜む、旅になぞらえられる神仏の移動。また神輿や山車、あるいは「ねぶた」のような祭礼のつくりものが動くことで、社会や人びとも連動して活動的になる。そのダイナミズムを解き明かすのが本特集のねらいである。あわせて旅する神がみをひろくヒンドゥーやカトリックの祭礼にも求め、比較の糸口もさぐりたい。

インドの山車

すぎもと よしお
杉本良男

民博 民族社会研究部

専攻は社会人類学、南アジア研究。スリランカ、南インドにおいてナシヨナリズムと宗教・文化についての調査研究に従事。最近は映画・フッジョン、津波災害復興などにも関心をもっている。

民博には、南インド、タミルナドゥ州マドラス（チェンナイ）にあるヒンドゥー教のパールッタサーラティ寺院のものと同形の山車が展示されている。複製とはいうものの、これはこれで本尊に魂を入れれば立派に実用に供することができるものである。実際の八割程度の大ささにつくってあるが、それでも天井につ



パールッタサーラティ寺院の巡行用の神像

かえるほど大きい。こうした大きな山車は、とくに南インドや東インドに多くみられる。

祭司がのつた山車が町内をめぐる

パールッタサーラティ寺院の山車は、毎年四月から五月にあたるタミル月チッテイライにおこなわれる一日間（二〇夜一日）の大祭のときにひきだされ、町内を巡行する。この時期の南インドは非常に暑い季節にあたり、各地で村の女神を祀る祭礼がおこなわれる季節でもある。ただし、山車にのせられる神さまは本尊ではなく、巡行用につくられたものである。町内を巡行する山車の勇壮なすがたは、京都祇園祭の山鉾巡行を思わせる。

大祭は寺院ごとに時期がちがっているが、一日間（二〇夜）おこなわれる例が多い。初日には旗揚げ式、最終日には旗納め式がある。期間中の何日かは山車が出て、町内をめぐる。山車には寺院つきの祭司がのり、人びとは祭司を通じてお供え物を神さまに捧げてお下がりをもろう。有名な寺院の大祭では二〇〇万単位の人びとが沿道に並び、周囲はすさまじい混雑となる。

山車の威力は宗教を超えて

このような大祭はヒンドゥー教に限らず、キリスト教やイスラームで

京都の祇園祭と御旅所

神輿には神さまが乗っているが、山車はふつう神さまに奉納する舞台装置なので神さまは乗っていない。元禄時代には神田祭、山王祭、三社祭などの江戸の著名な祭りには、神輿だけでなく、祇園祭と同様、豪華な山車のパレードが付随していた。しかし明治初期、神仏分離令が施行され、首都東京のお膝元では、華美な山車の随伴が無くなってしまった。

神人交感の機会を求めて 神輿に乗る神さまたち

京都の祇園祭では山鉾巡行が主役のように扱われてきた。山鉾巡行が行われる日（伝統的には先の祭りの日）に八坂神社から三基の神輿が出発し、氏子区域を回ったのち四条寺町の御旅所に到着する（神幸祭。御旅所に神さまがとどまられている間に氏子の奉仕を受け、現在では花笠巡行の二四日（後の祭りの日）に神輿に乗って八坂神社に戻る（還幸祭）。つまり、ふだんは八坂神社内に居る神さまが、神輿に乗って御旅

もりた さぶろう
森田三郎

甲南大学文学部教授

一九四五年、京都府に生まれる。京都大学大学院博士課程修了。専門は文化人類学（農民俗文化論・映像人類学）。著書に『祭りの文化人類学』（世界思想社）などがある。

所に行き、氏子たちの奉納を受け、神人交感が行われ、神社に戻るというのが祇園祭の構造なのである。

山鉾と神輿との難しい関係

しかし、じつはことはそう単純でもない。祇園祭の山鉾は、神輿が到着する前に御旅所を通過してしまう。神が来られる前にお祓いするためだという説明がなされるが、神輿が通るコースはほとんど重ならないことからわかるように、理屈に合わない。

天文二（一五三三）年、法華一揆のにおりに、「神事が行われなくても山鉾巡行はやりたい」と下京六六カ町の世話役が申し出たことからわかるように、山鉾を運行する側に神の前での奉納という意識が、もともと強くはないのである。

祇園祭が始まった貞観一一（八六九）年には、神泉苑に六六本の鉾をたてて疫病の退散を祈ったといわれているが、風流が盛んになり、後の山鉾巡行が行われるようになって、

もみられる。

二〇〇四年暮れに津波被害にあつた州中央海岸部のナガバツテヤナム市近郊にはウエーランガンニ聖堂（キリスト教）とナゴール聖廟（イスラーム）というインド全土に響く有名な聖地がある。ここではいづれも一日間の大祭が催され、そのうちの何日かは山車がでる。

ウエーランガンニでは、聖母マリアやイエス・キリストの像をのせた山車が出て、聖堂の周囲をめぐる。こうした大祭には、むしろヒンドゥー教徒が多く集まるといわれる。

ウエーランガンニ聖堂の大祭には例年一〇〇万人以上の見物が集まるが、二〇〇四年末の津波災害のあと、聖堂の周辺はとくに被害が大きく、巡礼客や観光客の足が遠のき、地元には大きな痛手となった。



町内を巡行する山車

とくに鉾には、天にいたるカミに降臨してもらおう依り代としての役割があった。鉾は、天にいる神がみかわれられ人間の住む世界に来るための門でもあった。山鉾には、神がみが降臨する動く祭壇と解釈できる側面がある。月鉾には月読命が、^{ツキヨミノミコト}天神山には天神が、南観音山には観音が、町の神として降臨しているとみなせるのである。



御旅所に入る前に神振りをする東御座 (2009年7月17日撮影)



左(東)から御旅所に鎮座した西御座、中御座、東御座、若御座 (2009年7月17日撮影)

起死回生を狙った地元の人びとは聖堂の周辺に限られていた山車の巡行ルートを変えて、鎮魂の意味をこめて海岸をまわることにした。こうした努力が実ったか、その後聖堂には津波前を超える多くの観光客が集まるようになったという。宗教を問わず、タミルナドゥにおける山車の威力をまざまざとみる思いがする。



神輿ごとにルートを違えて 賑やかに神輿の到来をつげる

御旅所が、現在の四条寺町に定まったのは、天正一九（一五九一）年の豊臣秀吉の命令による。それ以前は、少将井御旅所（冷泉東洞院）と大政所御旅所（烏丸高辻）の二カ所であった。

現在は、当初祇園祭が行われた神泉苑の南東の端（三条大宮東入ル）に、又旅所とも呼ばれる三条御供社がある。還幸祭のときに中御座、東御座の二基の神輿が安置され、神の依り代であるオハケがたてられ、奉饞祭が行われる。

ちなみに、三基の神輿には、主神素戔嗚尊（中御座）、主神の妻、櫛稲田姫命（東御座）、その子である八柱の御子神（西御座）が乗る。素戔嗚尊はインドの祇園精舎の守護神である牛頭天王や武塔神と習合し、それに伴って櫛稲田姫命は牛頭天王の後の頗梨采女と、八柱の御子神は八王子、八將軍と習合していることは、よく知られているとおりである。祇園祭も、時代の変化に応じて変容をしてきた。しかし、地上に駐留する神がみも天界に在住する神がみも、この期間、人びとの生活の場を訪れ、風流などの奉納を通して神人交感が行われ、人びとに疫病退散の御利益を与えるという構造には変わりはない。

青森ねぶた祭

三井 泉

日本大学経済学部教授

専門は経営学、経営人類学。現在の研究関心は経営理念の国際比較。共著に『会社じんのい学』（二〇〇一年、東方書店）、共編著に『経営理念—継承と伝播の経営人類学的研究—』（二〇〇八年、PHP研究所）。

真夏の日差しが和らぎ、青森の街に夕闇が迫る頃、勇壮なねぶたが小屋から一台また一台と通りに姿を現す。街には色とりどりの花笠を被り、揃いの浴衣に赤や青の襷をかけたハネトたちが鈴の音を響かせて集まってくる。日本中から詰めかけた観客たちは棧敷に陣取り、慌しく団扇を動かしながら、今や遅しと始まりの時を待ちわびる。

午後七時一〇分、花火の合図とともに一斉に囃子が鳴り響き、「ラッ セラー、ラッセラー、ラッセラー セラー！」のかけ声とともに、二十数台の巨大なねぶたが眠りから醒めてゆっくりと動き出す。待ちに待った「出陣」の瞬間である。

病気や災いを川や海に流す

ねぶたの起源は、夏の睡魔や疫病

目に見えず、 耳で知る 若宮神の旅

菅原 亮二

民俗文化研究部

専門は民俗学、民俗芸能研究。最近、九州各地の島々を巡り歩き、祭りや芸能の伝播や定着について考えている。

奈良の春日大社では、毎年一月中旬に春日若宮御祭がおこなわれる。この祭りは、一七日の「御旅所祭」に、神楽・東遊・田楽・細男・舞楽、翌一八日の相撲・後宴能といった様々な芸能が演じられることで知られる。ちょうど同じ時期におこなわれる京都南座の顔見世を加えれば、古代から近世までの芸能を一度に総覧するよい機会となるので、関西に居を移す以前から何度か見物に訪れていた。

近年は、御旅所で芸能を見ている時間と茶店で一服している時間がほとんど変わらなくなってしまったが、以前は芸能の奉納にとどまらず、「宵宮祭」や「遷幸の儀」や「還幸の儀」などの重要な行事にも付き合っている、見学していた。

を退散させる「ねぶり流し」や「七夕」などに廻ることが出来る。人形や行灯に病気や災いを封じ込め、それを川や海に流すことによって厄を祓おうとした祭祀である。今日でも祭りの最終日「ナヌカビ」には、ねぶたを船に載せて青森湾を巡航する「海上運行」という形で、その名残をとどめている。

巨大行灯により見物人を集めたという記録は弘前藩の時代から残っているが、今日のような形になったのは、青森市の戦後復興を願った港祭りに端を発している。当初から町衆の力により人的、経済的に支えられてきた都市祭りであるが、とくに人形ねぶたの大型化とともに費用も巨大化し、今日では、一台の制作と運行にかかる費用は二〇〇万円以上になるという。

経済効果は六〇〇億円

この費用を支えているのは、地元で商売をしている「お店」、つまり企業である。今日の青森ねぶたの大きな特徴の一つは、ねぶた人形の台座に企業名が掲げられ、ハネトの浴衣や法被にも企業名やロゴマークが目



社名を背負いねぶた小屋に詰めかける人たち

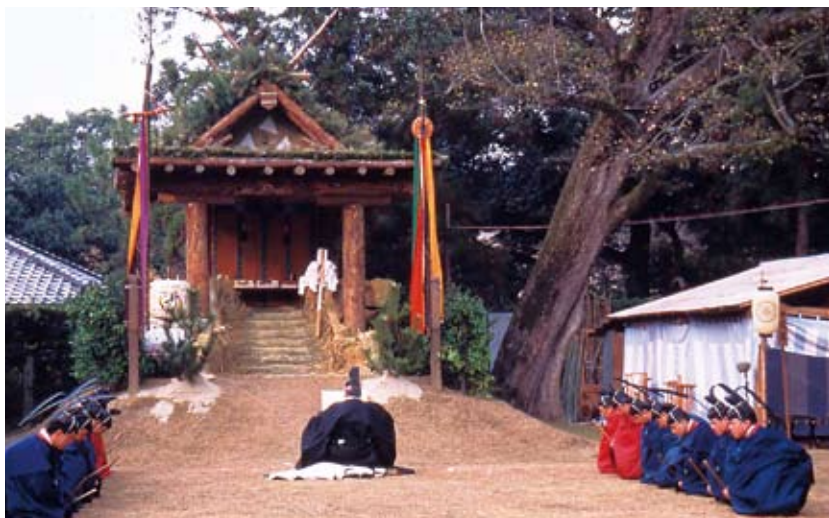


街中に睨みをきかせる「ねぶた武者」

立つところにある。つまり、青森ねぶたには「企業の祭り」という側面もある。

観光客三一九万人（二〇〇八年八月二日〜七日）、四九七億円（荘銀総研推計）の観光消費を生み、約六〇〇億円の経済波及効果をもつまでに成長した「巨大観光イベント」であれば、その宣伝効果を狙った企業の

春日若宮御祭「御旅所祭」での宮司祝詞奏上



春日若宮御祭「御旅所祭」での舞楽「落躰（らくそん）」の奉納



写真はいずれも春日大社提供

白装束に囲まれた若宮神が 暗闇を進む遷幸の儀

この祭りは、春日大社の本殿に祀られる神がみではなく、その御子神である若宮神の祭りである。普段は何もない御旅所に行宮を仮設し、若宮神を迎えて祭りがおこなわれる。

その若宮神を迎える行事が遷幸の儀で、一七日午前零時から若宮神社でおこなわれる。社殿での祭典の後、

若宮神が大勢の神社の人びとに守られて行宮に遷る。

このとき境内は、いっさいの灯火が消されて真っ暗闇となる。したがって、参道を進む若宮神の様子をはっきりと見ることはできないが、若宮神を囲む人びとが間断なく発する警蹕や楽人の奏でる道楽によって、その歩みを参列者は明確に知ることができる。

そして、同日、祭りの参加者が社参する「お渡り式」、それに続く御旅所祭での芸能の奉納の後、深夜に還幸の儀が行われる。若宮神は、遷幸の儀と同様、一切の灯火が消された暗闇のなかを、取り囲んだ大勢の人びとが発する警蹕と道楽とともに若宮神社に遷る。

見せない、神体の到来を 音で知らせる

御祭の若宮神のように、祭りの際に祭場とのあいだを往還する、いわば「旅する」神がみは、御輿や曳山が出るほうほうの祭りでも同様に見られ、必ずしも珍しいものではない。しかし、御輿や曳山による神霊の旅が、見物の衆目を集める可視的なものに対して、御祭では暗闇のなかでおこなわれているので見る事ができず、そうとう趣きが異なる。とはいえ、警蹕や道楽といった賑やかな音が伴い、人びとは耳で神霊の旅を明確に知ることができる点は、両者は共通する。

こうした神霊の旅のありようの異同は、それぞれの祭りの歴史を考慮すると、目に見えず、耳で知る神霊の旅から、目と耳で知る神霊の旅へという、旅する神霊のありようの変化あるいは、神霊の顕現に対する我々の意識や感覚の歴史的な変遷を示しているとも考えられて、興味深い。

バンングラデシユ 国際子ども映画祭

二〇〇九年一月二四日から三〇日にかけて、バンングラデシユの首都ダッカにおいて「第二回国際子ども映画祭 (International Children's Film Festival)」が開催された。この映画祭は「子どもによる、子どものための、子ども映画祭」というにふさわしく、参加者はもちろんのこと、出品、選抜、運営のすべてにおいて、一八歳以下の子どもたちが主体となっている。

四〇カ国から五六作品が集まる

上映作品には、おとなが子ども向けに制作した映画やテレビ番組、子どもを主人公またはテーマとした映画、そして一八歳以下の子どもが監督制作したフィクションとドキュメンタリーなど、四〇カ国から計一五六本の作品が集められた。期間中には、シンポジウムやワークショップも数回開かれた。

映画祭のメインは、一八歳以下の監督によって制作された映画のコン

ある。映画監督や関係者、教育者、NGO職員などによって構成された「バンングラデシユ子ども映画協会 (Children's Film Society, Bangladesh)」が、この映画祭を組織している。同協会は、映画祭開催のほか、バンングラデシユ国内各地において巡回映画上映会や子ども向け映像制作ワークショップを定期的に開いている。

世界的なビデオカメラの流通とカメラ付き携帯電話の普及は、バンングラデシユも例外ではない。こうした状況のなかで、先進国発展途上国を問わず、映像は情報受信の機会であると同時に、情報発信と表現のツールとして活用されている。

子どもたちに対して、まさに「読み書き」一両側面からメディアリテラシーが教諭される動きは広がりがつつある。映像制作を学んだ子どもたちは、自らを取り巻く社会にカメラを向け、表現し、映画祭のような場で発信する。

無力かもしれないが、無知ではない子どもたち

この映画祭のディレクターを務めるのは、バンングラデシユの代表的映画監督の一人であるモルシェドウル・イスラム (Moshedul Islam) だ。



国際子ども映画祭のオープニングセレモニー



国際子ども映画祭パンフレット

バンングラデシユの人びとは、映画を大きく二種類に分類している。一つは国内向けに制作される、歌と踊り、アクション、ヒーロー対悪役という単純明快なストーリーに特徴づけられる映画である。もう一方は、海外向けに作られる社会派系映画(後者は「International Cinema」と呼ばれる)である。モルシェドウル・イスラムは、後者の映画を主に制作している。

彼の映画は、現代バンングラデシユ

の抱える社会問題をテーマとしながら、自然の脅威と豊かさ、富の虚無と貧困の力など、観る者に多くを問いかける。

子ども映画協会と国際子ども映画



モルシェドウル・イスラム監督*

*のついでに写真とともにモルシェドウル・イスラム監督提供



モルシェドウル・イスラム監督映画作品「Durotto」*

ペティションである。応募作品のなかから上映作品、受賞作品を選ぶ審査員も、五人の子どもたちで構成されている。しかし、だからといって、映画祭が子どもに閉じたものではない。中央図書館をはじめとする

五カ所の会場で六日間開かれた映画祭には、子ども連れを含め、おとなの来訪者も決して少なくなく、のべ一万人以上が訪れた。

そうした来訪者の誘導、パンフレットやグッズ、飲食物の販売、上映スケジュールの管理のすべてを子どもたちが担う。映画という現代バンングラデシユにおける最大の娯楽かつメディアの一つに、子どもを対象化するだけでなく、参入させる場が形成されている。

社会にカメラを向け、表現しようとする子どもたち

とはいえ、この「国際子ども映画祭」の仕掛け人は、やはりおとなで

祭を始めるきっかけとなった作品『Durotto』(二〇〇四、英題『Alienation』邦題『ぼくはひとりぼっち』)は、バンングラデシユを代表する現代作家の一人フマユン・アフメッド (Humayun Ahmed) の原作。経済的に裕福な上流社会の籠の中で生きる少年が、駅で暮らすストリートチルドレンの兄妹と出会って一日を共に過ごすなかで活力を取り戻す。しかし、最後にはやはり両者の子どもたちが生きていく社会は別である現実を目の当たりにする。

この映画は、第一五回アジアフォーカス福岡国際映画祭(二〇〇五年)でも上映されている。

「無力でかわいそうな子どもたち」「それが開発と援助の文脈で語られるバンングラデシユの子どもたちに対する世界のイメージである。しかし、子どもたちは、自分たちがどのように見られているか、おとなたちは自分たちに何を伝えようとしているのか、そして自分たちは社会をどのように見ているのかということについて、決して無知ではないことを「国際子ども映画祭」は示している。

みなみで かずよ
南出 和余
日本学術振興会 特別研究員

専門は文化人類学。バンングラデシユの子どもの生活世界、子どもが大人になる過程について研究している。最近はその研究手法としての映像制作にも取り組んでいる。



ネットワーク型博物館の構想

中国最大の少数民族壮族のほか、^{チワン}瑶族、^{ヤオ}苗族などの多くの民族が漢族に混じって暮らす広西壮族自治区。民族の伝統文化を紹介しつつ、自治区内に建設中の10の「生態博物館」のワークステーションとして位置づけられている



壮族が行事で銅鼓をたたく場面を再現することで楽器の演奏法を伝える



劉三姐が歌で競う場面の展示。ジオラマ、絵画がたくみに使用されている

銅鼓をかたどった博物館の外観



展示の構成

「五彩八桂」展示場は、広西の民族文化の展示で「居住と生産生活」「服飾文化」「民間工芸」「年中行事・慶事と儀礼」の四つのテーマ展示場から成っている。「居住と生産生活」では、山地や田園の生活、水上市・漁民の生活、都市や定期市での交易を紹介している。

「服飾文化」では、服飾・印染・刺繡・織錦が展示されている。「民間工芸」では、作陶、岩画、彫刻、絵画、木工、編織、製紙など。

「年中行事・慶事と儀礼」では春節・中秋節や各民族の重要な年中行事、生育・婚礼・長寿祝いなどの人生儀礼、さらには民間信仰や芸能の展示がされている。

広西では古代の銅鼓が数多く発掘され、広西を代表する文物の一つであるが、「時空を越えて鼓音が響く銅鼓文化」展示では代表的な銅鼓や

俗の展示にも用いられている。都市

居住民が農漁村の生業やふるい伝統を理解するには格好であるが、同時に伝統的な文化の展示に偏りがちな欠点もある。

第二に、少数民族のみならず漢族の展示にも積極的である。たとえば服飾、龍舞、ふるい家具、ふるい街の薬店・布地店・雑貨店などの店舗が復原されている。なお、南寧では二〇〇四年以来、毎年アセアン博覧会が開催されているが、アセアン諸国のコーナーを企画展示で設けるなど関

心の高さが展示にも活かされている。

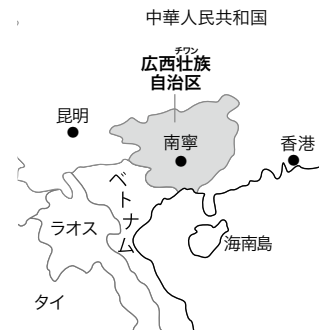
ところで博物館の創設の目的として、展示のみならず、広西で一〇カ所建設が進められているエコ・ミュージアム「生態博物館」とのネットワーク機能がある。それぞれの生態博物館が基地となって、民族文化の保護・研究・伝承・展示を行い、それらの総合的なワークステーションとして位置付けられている。

こうしたネットワーク型博物館という構想は斬新であり、今後の動向に目が離せない。

塚田 誠之

民博先端人類科学研究部

文学博士。北海道大学大学院博士後期課程修了の後、一九八八年から民博で中国南部諸民族の歴史民族学的研究に従事。最近、民族の国境を越える移動と交流の研究や壮族社会のなりたちを見直す研究に熱中しています。著書に『壮族文化史研究』（二〇〇〇年、第一書房）など。



現在も使用している場面が展示されている。

新たな試み

展示の特徴として、第一に、ジオラマと絵画を組み合わせてさまざまな場面が観衆にわかりやすいよう工夫されている。牛に曳かせるスキヤビーン搾り機の使い方、京族が独特の網で魚を捕る場面、衣服材料の織り・染めやつや出し、竹編み帽子の編み方、手作業での製紙や鉄鍛冶など、道具の使い方が一日瞭然である。この手法は楽器の演奏や婚礼習



復原された壮族の高床式住居は中に入ることができる

表紙モノ語り

聖人像の輿を先導するラッパ、カーニャ

標本名:笛(カーニャ) 標本番号:H0110333、0110334

地域:ボリビア 1983年収集

●
やまもと のりお
山本 紀夫
民博 名誉教授

1968年以来、アンデスを中心として世界の山岳地域で
主として伝統的な環境利用の方法の調査研究に従事。

近著に『ジャガイモのきた道』(岩波新書)

アンデスのほぼ真ん中あたりにボリビアという国がある。アンデス諸国のなかでも、とくに先住民人口の多い国である。そのため、ボリビア高地の宗教はスペイン人の侵略以前のからのアンデス土着の伝統的な色彩の濃いものである、と私は思っていた。しかし、そのような考え方はタリハという町の祭りを見て大きく変わった。そこでは、キリスト教がすっかり根づき、キリスト教の祭礼が町をあげての盛大なものになっていたからである。

タリハは、ボリビアの最南端に位置し、標高が約二〇〇〇メートル、人口が数万ほどの小都市である。この町で、毎年の九月に数千人もの町の住民が参加し、一カ月近くにわたっておこなわれる祭りがある。「サン・ロケ」とよばれるものだ。サン・ロケとは、タリハの町にある教会のひとつに安置されている守護聖人のことでもあり、その祭りではこの聖人像を御輿にのせて町の中の教区をねり歩くのだ。

このとき、おもしろい楽器が御輿を先導する。それがカーニャである。カーニャは、スペイン語で竹または竹に類似した植物を意味する。が、タリハでカーニャといえは、ふつう長さが三〜四メートルの竹の先端にラッパをつけた、どこかアルプスのホルンを思い起こさせる笛のことである。この笛を数十人の男たちが手にもち、歩きながら吹くと「ブッツ、ブッツ、ブッツ。ブッツ、ブッツ」という低くて大きな音が道路をはさんだ建物にこだまする。この音は祭礼という非日常的な雰囲気や町中にかもしだすとともに、守護聖人の威信を高めるためのものなのかもしれない。

なお、このカーニャはアメリカ展示「祈る」のコーナーで展示中である。



特別展

「自然のこえ命のかたち
—カナダ先住民の生み
だす美」

カナダ文明博物館の巡回展「カナダ先住民」を核として、民博の研究者が調査・収集してきたイヌイットと北西海岸先住民の版画などのアート作品をあわせて展示することにより、自然と生命が一体化する世界観をもつ先住民文化のユニークさとすばらしさを紹介します。

会期 八月二三日(木)～二日(火)
会場 常設展示場内
■関連イベント
「凸凹(decoboco)ワイクシヨップ」大切な人とつながらる継手ペンダントを作ろう」
実施日 八月三〇日(日)
時間 一三時三〇分～一六時
会場 第三セミナー室
参加費 五〇〇円(材料費・保険代)
講師 M.Y.Yokoyama
点字体験&展示資料解説「さわる文化への招待」
一点字を触学、展示で触学」
実施日 八月二日(土)、九月

「点字の考案者ルイ・ブライユ生誕二〇〇年記念」
念：点天展」

企画展

二日(土)
時間 二時～二六時
会場 企画展示場入口
参加費 無料
講師 みんなくミュージアムパートナーズ+全国視覚障害者情報提供施設協会
お問い合わせ 情報企画課情報企画係
電話 〇六六八七八八五三三
(平日九時～一七時)

「みんなく秋の遠足・校外学習
事前見学&ガイダンス
を開催」
秋の遠足・校外学習に向けて事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。
実施日 八月二日(金)、二四日(月)、二五日(火)
時間 一四時～一七時(随時対応)

「みんなくミュージアムパートナーズ企画
「パタパタをつくらう!」
からくりおもちゃ編」
夏休みの工作に、からくりおもちゃを作ってみよう! テーブルを張り合わせるだけで、四つの絵がパタパタと音を立てて変わるおもちゃです。
実施日 八月二三日(日)
時間 ①一四時～二二時

応じます)
会場 第五セミナー室ほか
参加申し込み方法
みんなくホームページから参加申込書をダウンロードし、必要事項を明記のうえ、ファックスにてお送りください。
お問い合わせ 広報企画室広報係
電話 〇六六八七八八五三三
(平日九時～一七時)

「夏休みワークシヨップ
「手のひらゲルをつくってみよう」」
モンゴルの移動式住居「ゲル(天幕)」。中央・北アジア展示でゲルについて学んだら、ペーパークラフトの「ゲル」を自分たちの手でつくってみよう。
日時 八月八日(土)、九日(日)一〇時

会場 第三セミナー室ほか
定員 各日一五組(事前申込制)
参加費 一組五〇〇円(材料費・保険代)
参加申し込み方法
希望日・参加人数・氏名・住所・電話番号を左記までお知らせください。
なお、小学校四年生以下の方は保護者同伴でご参加ください。
お問い合わせ 財団法人千里文化財団
E-mail: mongolo@senri-f.or.jp
FAX 〇六六八七八八三七一六
電話 〇六六八七七八八九三
平日九時～一七時

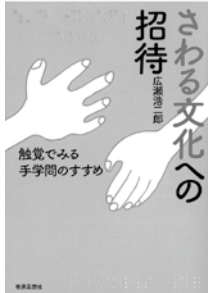
刊行物紹介

■櫻永 真佐夫 著
『ベトナム黒タイの祖先祭祀
家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』
風響社 定価：6,300円(税込)



社会を成形するうえで、文字文化はどのような役割を果たしてきたのか。ベトナム北西地方の水稲耕作民、黒タイを例に、現地調査の成果と、系譜文書など現地文字資料の分析を統合して迫る。

■廣瀬 浩二郎 著
『さわる文化への招待
触覚でみる手学問のすすめ』
世界思想社 定価：1,995円(税込)



中途失明した著者が、見えない人生の中で気づいた“豊かな触生活”。旅行・点字・花見・武道など、さわって「みる」楽しさを紹介、読者を触文化の旅へと誘う。斬新かつユニークな触学入門書。

■谷本一之・井上紘一 編
『「渡鴉のアーチ」(1903-2002)
ジェサップ北太平洋調査を追試検証する』
(国立民族学博物館調査報告No.82)

■庄司博史 編
『移民とともに変わる地域と国家』
(国立民族学博物館調査報告No.83)

みんなくゼミナール

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13:30~15:00 (13:00開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料

展示場をご覧になる方は、観覧料が必要です。

第375回 8月15日(土)
「音盤に聴く東アジア近代音楽史
—日本コロムビア外地録音資料」
講師 福岡正太(文化資源研究センター准教授)

戦前、日本コロムビア社は、上海、台湾、朝鮮等に向けてレコードを制作販売していました。現在、民博はその原盤を所蔵しています。東アジア近代音楽史をその音溝に刻んだ外地録音資料の概要をご紹介します。



第376回 9月19日(土)
「イヌイット・アートの世界
—極北からのメッセージ」【特別展関連】
講師 岸上伸啓(先端人類科学研究部教授)

秋の特別展では、イヌイットの版画を展示します。イヌイットが制作した版画や彫刻品を事例としてイヌイット・アートの誕生から今日にいたるまでの歴史的展開についてお話しします。



イヌイットの版画「偉大なふくろう」 Pitaloosie作 1981年、カナダ・(旧)北西準州・ケープドースット(国立民族学博物館蔵)

友の会

友の会講演会 9月5日(土)

シリーズ「先住民のいま」③
共生の道をさぐる「先住民」
—オーストラリアにて
講師 松山利夫(民族文化研究部教授)
時間●14:00~15:30(13:30開場)
会場●国立民族学博物館
第5セミナー室
定員●96名(当日先着順、会員証をご提示ください)

東京講演会 9月13日(日)

海外所蔵のアイヌ民族資料
—先住民博物館をめぐって
講師 小谷凱宣(名古屋大学名誉教授)
先住民をめぐる世界の動向をうけて、国立のアイヌ民族博物館設立が話題にのぼっています。しかし、国内の資料だけでは、アイヌ文化の時代差や地域差を具体的に展示することは難しいのです。そこには近代日本の先住民政策や研究史などがからんでいます。国立アメリカ・インディアン博物館を例にあげて考えます。
時間●14:00~15:30(13:30開場)
会場●JICA地球ひろば
セミナールーム202
定員●40名(当日先着順、会員証をご提示ください)

東京講演会 9月26日(土)

特別展「自然のこえ 命のかたち」関連
カナダ先住民のいま—イヌイットと北西海岸先住民の世界
講師 岸上伸啓(先端人類科学研究部教授)
カナダの約117万人の先住民の大半は出身地を離れ、伝統的な生活とは異なる都市生活を営んでいます。ホームランドと都市のそれぞれの生活の中で、先住民としてのアイデンティティを模索する彼らの様子を、アート作品に着目して紹介します。
時間●14:00~15:30(13:30開場)
会場●JICA地球ひろば
セミナールーム302
定員●60名(当日先着順、会員証をご提示ください)

国立民族学博物館 友の会
電話 06-6877-8893
ファックス 06-6878-3716
電話でのお問い合わせは
月曜～金曜日9時から17時まで
をお願いします。
http://www.senri-f.or.jp/
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

ミュージアム・ショップ

フェア・トレード・フェア

今月、ショップでは、パレスチナのNPOによる刺繍製品や、東ティモール産の香り高いコーヒード、カンボジア



パレスチナの伝統刺繍を施した通帳入れ(2,400円)・眼鏡ケース(2,550円)・ランチョンバッグ(5,700円)・東ティモール産のコーヒード(粉・豆)(各1,050円)

のシルク製品などのフェア・トレード・グッズを紹介しています。なかでも、美しいパレスチナ刺繍のバッグや小物は今回ショップに初登場。新しくなった西アジア展示の花嫁衣装にも見られるパレスチナの伝統刺繍。そんな母から娘へ伝えられる美しい技を、ぜひ手に取ってご覧ください。

国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ
電話 06-6876-3112
ファックス 06-6876-0875
水曜日定休
ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/
E-mail shop@senri-f.or.jp

ジェッタ・ダルジの仕立ての技術

ジェッタは、ネパール語で「長男」を意味する。彼の本名はカンマル・ダルジなのだが、村人はみな彼のことをジェッタと呼ぶ。

ダルジはダメイともいい、服の仕立てと冠婚葬祭のさいに音楽を演奏するカーストである。そういうと聞こえはよいが、カーストの階層でいうと最下層の、いわゆる不浄カーストに属する。だから、彼は私の住んでいた家で服を新調したり、破れた所を繕うときには、家の軒下にミシンを置いて仕事をする。不浄とみなされる彼は、上位カーストの家の中には入れてもらえないのである。

●青い布で縁取られたチョッキ
私はジェッタの仕事にとても驚かされたことがある。一〇年前、私はお世話になった羊飼いかからアバラという羊毛のチョッキをいただいた。



ジェッタの家族(1998年)

この村では、羊毛を織機で織り、洗って縮めてフェルトに加工する。フェルトの布までは羊飼いの家で作るが、チョッキに加工するにはさらに裁断縫合する必要がある。それで家の人は、ジェッタを呼んだのである。フェルトとはいえ、粗くて硬いネパール原産種の羊毛を使うので、布の厚さは一センチメートル近くある。さすがのジェッタでも今回ばかりはミシンを使えまい。どう考えても、この厚さではミシンの布を押さえるストッパーを通らない。

そんな私の考えを見透かしたかのように、ジェッタはミシンのストッパーを上げて縫い出した。マニユアル・ミシンならではの技である。だが、布を二枚重ねて縫うのは無理だ。そこで彼は羊毛の布の間に、青い布を縫いこみ、分厚い羊毛の布をつなげた。完成したチョッキには、布のつなぎ目すべてに青い布があててある。それはあたかも縁取りがほどこされたように仕上がっている。青い布はたんなる飾りではなく、実用的な機能をもっていたのである。

●世界に誇れ、職人の技
もともとそんな伝統的な知識も、近代的な社会の動きに飲み込まれそ

うになっている。「出稼ぎに行くからパスポート用の写真をとってくれ」。ある日、ジェッタはそう言うて私のところにやってきた。せっかくよい仕立ての技術をもっていて、外国に行けばどうせ単なる非熟練労働者とみなされてしまうのだから。私はやるせなく思ったものである。

それから一〇年がたち、結局、ジェッタは外国に行かなかつた。お母さんがなくなり、彼は八人兄弟がひしめく母屋に一家の主として移ってきた。かわりに彼の弟がカタルへ出稼ぎに行き、ついでこの間村に戻ってきた。弟はTシャツ、Gパン、サングラスのいでたちで颯爽と現われ、おみやげには最新のステレオを買ってきた。

この一〇年で村では海外への出稼ぎが普及した。かつて不浄カーストと蔑まれた彼らでも、他カーストと同様に経済的な蓄積が可能になった。私はそれが今後彼らの社会的な地位の向上につながると、考えている。同時に彼らが長年培ってきた技術や知識に誇りを持ち、後世に伝えて欲しいとも願っている。



羊毛のチョッキを仕立てるジェッタ。縁取りの青い布を縫い付けている



わたなべ かずゆき
渡辺 和之
立命館大学非常勤講師
民博 共同研究員

専門は環境人類学。ネパールの羊飼いの資源利用を研究している。最近では、彼らの村の社会変容を調査している。著書に『羊飼いの民族誌』(明石書店、二〇〇九年)。

SUKUPAYNUUTAR 大阪 ORTAWEKARPPA 若いアイヌたち大阪に集う

普段は離れて暮らしている若い世代の同族たちと話し合う。それも大阪で、という珍しい経験をした。

三月二十五日から二六日にかけて、北海道そして東京にくらす若手のアイヌ民族一二名が、大阪に集結した。民博で開催された「先住民族としての若手アイヌの会」に集まった面々は、二〇歳から四〇代まで、出身地も活動内容も多様な人びとである。

●大阪にもアイヌ文化の基点が

北海道からは、北海道ウタリ協会（現アイヌ協会）関係者や、平取町出身の川上将史さん（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）、そしてアイヌ民族博物館で研修中の川村このみさん（札幌市出身）、そして私の六名が参加した。川上さん、川村さんは研究者的な志向をもちつつ、芸能や祭礼の担い手としても研鑽をつんでいる、期待の若手だ。今回の討議のなかでも、現在の学習と、将来の希望を熟っぽく語った。

東京からは、パフォーミンググループ・アイヌレブルズのメンバー 酒井厚司さん、芳野省吾さん、館下直子さん（いずれも帯広市出身）、アイヌ文化交流センターの木原仁美

さんらが参加した。参加者の知人で大阪在住のアイヌ民族女性、藤戸裕子さん（阿寒出身）も出席した。

藤戸さんは大阪で「minami naの会」というサークルを作り、アイヌの歌や手工芸を広める活動を展開中だという。私の知る限り大阪では初の試みだ。アイヌ文化普及の基点が全国にできつつあることを実感した。

簡単な自己紹介の後は、リラックした雰囲気でのフリートーク形式で参加者のこれまでの経験などが話し合われた。なにしろ、初めて顔を合わせる人も多く、仮に知人であっても「アイヌとは」といった話にまで及ぶことはめつたにない。まずは、互いの経験や価値観を共有することに時間をかけた。

●「アイヌ同士の差別」への危惧

話の流れから、館下さんが自身の経験した深刻な差別体験を語る場面があった。他の参加者からは「これが現代の話とは、とても信じられない」と、ショックを隠せない反応もあった。「差別はあるか」という話題ひとつをとっても、反応はさまざまである。性格や容貌など個人の事

情ばかりでなく、過ごしてきた環境や男女といった立場によって、同じ体験をしても受け止め方は異なる。

川村さんからはアイヌ同士の差別という話題もでた。私なりに彼女の意図を汲めば、「アイヌらしさ」が再評価されてくるなかで、「アイヌ的」容姿や「伝統文化」の知識、あるいはコネをもたないアイヌは排除される傾向にあるということだと思ふ。私も皮肉に感じている問題だが、注意しなければ深刻化する恐れがある。

今回の集まりでは、こうしたギャップの実感が、もっとも重要な成果だったのではないかと。昨年からの全国組織化への関心が高まり、具体的な検討もされている。そうしたなかで「誰がアイヌの声を代表し得るのか」という問題が再認識できたことは幸いだった。



討議の様子



主催者側から田村副館長による挨拶

きたはら じろうた
北原次郎太
財団法人アイヌ民族博物館
学芸員

樺太を中心にアイヌの精神文化物質文化に関心をもつ。二〇〇八年から、口承文芸をデジタル絵本化し、アイヌ民族博物館のホームページで公開する作業に取り組む。

| | | |
|------|------|-----|
| 多文化を | ささえる | 人びと |
|------|------|-----|

ブラジル人の交流の場づくり

関西ブラジル人コミュニティ

二〇〇九年六月二十八日、神戸の旧神戸移住センターで、在日ブラジル人の春の祭り「フェスタ・ジュニーナ」が開催された。主催したのは関



今年6月3日、海外移住と文化の交流センターとして新装開館した旧神戸移住センター。CBKはこの3階に置かれている

関西における在日ブラジル人は関東や東海地方に比べ圧倒的に少ない。関西ブラジル人コミュニティはそんな彼らとともにすでに二〇年のコミュニティ活動を続けてきた。そこにはメンバーが少数で分散するが故の活動の必要性があった

西ブラジル人コミュニティ(CBK)である。一九九四年より例年開催しているが、今年にはほぼ五〇〇人もの参加があり、大盛況であった。

CBKが現在活動の拠点を置く「旧神戸移住センター」(一九二八年設立)は、かつて神戸港から移民として南米に向けて出発した人びとが、渡航の準備のため最後の数日をすごした施設で、日系ブラジル移民の子孫にとっては縁の深い建物である。現在は神戸市の管理下で、海外移住と文化の交流センターとして改装され、アメリカ大陸を中心とする日系移民の歴史資料を展示している。

コミュニティ活動の始まり

CBKの設立者、松原マリナさんが、父の祖国の地を踏んだのは一九八八年であった。のちに日本プロサッカーチームのコーチとなる夫、ネルソン勝さんの同伴者として来日



フェスタ・ジュニーナ(6月祭)。農民の恰好でダンスをし、思う存分たのしむブラジルの伝統は日本でも引き継がれている

地域のブラジル人をささえて

設立以来まもなく一〇年を迎えるCBKだが、決して大きな組織ではなく、派手な活動もしてこなかった。それでも、今日まで活動を続けることができた理由はなにかあったらう。「ひとつは、無理をせず、地域のブラジル人の規模と需要に沿った活動をめざしてきたからでは」と松原さんはいう。関西のブラジル人は、数



ポルトガル語教室。子どもたちの母語は日本語になったが、家族やブラジルとの紐帯としてポルトガル語を学ばせたい親は多い

の湖西、湖南地域をのぞけば、近隣に集住地域がなく、大きな組織づくりにエネルギーを費やす必要はなかった。一方、CBKの活動は地域的に分散し、多様な生活基盤をもつブラジル人の経済や生活支援にあまり重点をおいていない。その分、ブラジル人、とくに子どもたちの言語・文化活動支援やブラジル人と日本人との交流を重視してきた。

日系を中心とする在日ブラジル人の多くは、来日以来すでに一五年近くを経過した。幼少のころ来日した子どもの多くが成人した。ブラジル人集住地と異なり、日本で生まれた子どもたちの多くは、日本の学校に通い、日本語環境で育ったため、ポルトガル語はほとんどできない。一時と異なり、ブラジルへの帰国ではなく、日本定住の道を選択した人びとはめずらしくない。

した。神戸に移り住んだ松原マリナさんは、一九九九年、神戸長田区の「たかとりコミュニティセンター」を拠点に活動するワールドキッズコミュニティを通じて、日系ブラジル人の子どもたちへの教育支援やブラジル人の生活相談にかかわることになった。

数こそ少ないものの、兵庫県でもブラジルからの移民労働者の子どもたちは、ことばや教育の問題に直面しはじめていた。日本語が十分でないために授業についていけず、両親は子どもの学校との連絡にさえ不自由していた。同年代の子どもを二人抱えていた松原さんにとって決して人ごとではなかった。日本語の能力不足は、生活情報の不足を意味し、医療や行政サービスを受けられないなどの問題も起こしていた。毎日の労働に追われる一方で、自分たちの生活圏に閉じこもりがちなブラジル

今後のCBKの役割

かといって、ブラジル人が日本人に同化し、日本社会にすんなり融合することはないだろう。これからも彼らへの支援は必要であろう。ブラジル人の少ないこの地では、ブラジルへ渡った日系移民が何十年も祖国を思い、文化やことばを受けついできたように、いまの日本にはブラジルのことばや文化を身につけ、ブラジルを祖国とおもう人びとがいる。

松原さんはいく「関西の在日ブラジル人にとって、年に数回でも仲間と集い、ポルトガル語で語りあう場があることだけでも大きな安らぎです。子どもたちにとっては、ポルトガル語を学ぶことだけでも」。たとえ少しでも、ポルトガル語を学ぶことは、ブラジル人としての自覚と誇りをたもつうえで欠かせないという事実、ブラジル語教室に通い、自信をもった子ども一人が京都外国語大学でブラジルポルトガル語を専攻することになった。これは、みんなの大きな励みにもなっている。

二〇〇八年春、ブラジル移民一〇〇周年記念行事が神戸市内で数週間わたって開催され、のべ一万人が訪れた。このあと、CBKの行事への参加者はブラジル人、日本人ともに急増している。旧神戸移住センターの改装が大きく報道されたこと

しょうじ ひろし
庄司博史
民博 民族社会研究所
言語学・言語政策論。二〇〇四年に特別展「多みんぞくニホン」を企画した。近年は移民言語や多民族化の諸現象に関心をもっている。共・編著書に「多みんぞくニホン」(二〇〇四年)『事典 日本の多言語社会』(二〇〇五年)など。



松原マリナ、ネルソン勝夫妻。在日ブラジル人のさまざまな催しに長年にわたり貢献してきた

人は、社会との接点が希薄であった。在日ブラジル人への支援活動にかかわりはじめた松原さんは、関西におけるブラジル人支援組織の必要性を感じるようになった。二〇〇一年、松原さんを中心に設立されたCBKは、独立とともに神戸の町をみわたす高台にある旧神戸移住センターに移ることになった。以来、ポルトガ

ブラジル移民100周年にあたる2008年、神戸市のポートアイランドで大規模な記念祭が催された



も関係がある。理由はどうであれ、ブラジル人との交流活動にボランティア・スタッフとして加わる人もそれにつれ増え、三十数名になった。「不況の真つただ中ですが、少しでも多くの地域のブラジル人、市民を取り込んだ交流の場をめざしたい。これからも日本社会の、地域の一員として活躍するブラジル人を増やすことが目的です」。そういう松原さんの楽観的な展望こそがCBKの発展を支えているように思えた。

強壯の生薬として 珍重された獣 〈オットセイ〉

動物としての「オットセイ」については、本誌
2007年9月号に興味深い記事がありました。
この海獣はしかし、別なところでも面白いのです



これが「おっとせい」(臘腸臍)です。
実は陰莖



「おっとせい」あるいは「オットセイ」という動物。ご存じですかね。動物園や水族館で大きな紐を鼻に乗せている姿を連想される方もいらっしゃるでしょうし(ほんとはちがうのですけどね)、あるいはハーレムを作る動物としてのほうが良く知られているかもしれません。また毛皮獣としても有名ですね。

おっとせいの獣名は「おっとつ」

ところで「おっとせい」ですが、どんな言葉に由来していると思えますか。英語? ではありませんし、ロシア語でもなさそうです。そうなんです。これは日本語なんです。ものの本によりますと、日本では

寛永一五(一六三八)年刊の『俳諧毛吹草』に出てくるとありますから、江戸時代にはすでに知られていた動物ですね。有名な『本朝食鑑』に「臘腸臍 積名俗訓乙十世伊」と記されているので、「おっとせい」は本来「臘腸臍」と書いていたのです。読みは「おっとせい」のほかに「おっとさい」というのもありました。当然「臍」の読みですね。

明の李時珍があらわした『本草綱目』獣部第五十一巻には「臘腸」獣と採録されています。読みは「おっとつ」です。異名で「海狗腎」ともいいます。

これを小野蘭山著『本草綱目啓蒙』での解説によってみますと「臘腸ハ獣ノ名、外腎ヲ用ユルニ臍ヲ連ネトル、故ニ臘腸臍ト云」とあり「本邦(日本のこと)ニテ直ニヲツトセイヲ獣ノ名トスルハ誤リナリ」

アイヌ語から中国語へ

「おっとせい」は北太平洋やベーリング海に繁殖地を有していますが、日本近海には樺太島南端のロベン島(海豹島)に繁殖地をもつ「おっとせい」がオホーツク海沿いに南下して多くは北海道の噴火湾にはいり、一部が奥尻島沖へ回遊しますが、な

おっとせい猟の準備



噴火湾での狩猟



日本の役人に差出してほうびをもらう



捕獲して帰村

かには千葉県沖にいたるものがあるとのこと。で、「臘腸」ということですが、金田一京助氏によりますと、もともとアイヌ語のオンネツ(onnets)が日本語に入ってウネウ(umew)と訛り、それが長崎を経て中国にはいつて臘腸になったのだろうと推定されています。つまりオンネツが音訳されて臘腸になったというのです。金田一氏は中国語では「ウネウ

であつたはずだ」といいます(『金田一京助全集』六)。同僚の韓敏准教授にうかがうと、この文字は現代のことばでは~~オットセイ~~と発音されること。なんとなくオンネツやウネウを彷彿させませんか。

中国で臘腸臍が生薬となり、『本草綱目』に記載され、それが日本の本草家のバイブルのようなものであったから、日本でもさまざまに本に引用されるようになりましたし、商人たちの取引の対象ともなりました。

苛酷な猟の対象物

ところでロベン島の「おっとせい」ですが噴火湾に回遊すると書きましたが、一月から二月が最大数に達します。

一八世紀から一九世紀なかばにかけて、この「おっとせい」をめぐる



塩漬にしたおっとせい

オットセイ

Callorhinus ursinus 英名 Fur Seal
食肉目アシカ科

アシカに類似する海獣であるがアシカよりも小型で体長は雄2.5m、雌で1.3mほど。からだは紡錘形を呈し、四肢は短くヒレ状。陸上歩行ができる。前肢は遊泳と歩行に用い、後肢は海中では遊泳に用いる。体色は成獣の背中では黒茶またこげ茶。体毛は上毛と下毛に分かれ、下毛は短く密生する。

繁殖地は北太平洋、ベーリング海のプリビロフ諸島、コマンドー諸島、南樺太のロベン島など。海棲の毛皮獣としてラッコとともに珍重され、大量捕獲されるようになると激減を恐れ、1911年、日米加ソ連の四カ国で国際協定を締結した(「オットセイ保護条約」1988年失効)。南半球にはミナミオットセイ属が棲息する。(西脇昌治『鯨類・鯨脚類』(東大出版会、1965年)による。)

て噴火湾のアイヌの人びとは海上に猟に出ます。捕らえた「おっとせい」は徳川将軍への献上品となります。だから松前藩や松前奉行所はアイヌを競わせて一頭でも多く捕獲させます。内湾とはいえ、冬の海です。きわめて苛酷な、しかも危険の多い海獣猟です。コタンごとに猟域が厳しく決められていますから、一日、猟に出ている一頭の捕獲さえできなかったことが多かったといわれています。

「おっとせい」を猟するのは唯一アイヌの人びとだけでしたから当然生産量は限られます。献上した残りを商人たちが競って求めたのですが、にせものがとても多かつたということです。

なお図版は佐々木ほか編『蝦夷島奇観』(一九八二年・雄峰社)から引用しました。

佐々木利和
民博 先端人類科学研究部

アイヌの民族誌を通時的に勉強しています。

おっとせいが泳ぎながら寝ているところ。必ず白い鳥が側にいます。

歳時 世相篇 17

一九三四年夏、アメリカ合衆国のアーカンソー州で小さな言語学の講習会が開かれた。受講生は二名。この「キャンプ・ウィクリフ」は、その後毎年開催され、形を変えながら現在まで続いている。

夏に開催されることから「夏期言語学講座 Summer Institute of Linguistics」と呼ばれた通称名が、やがて団体の名前となった。現在の正式名称は長年親しまれてきた頭文字をとった呼び名SIL（エス・アイ・エル）を継承し、「SILインターナショナル」となっている。

NPBZYD

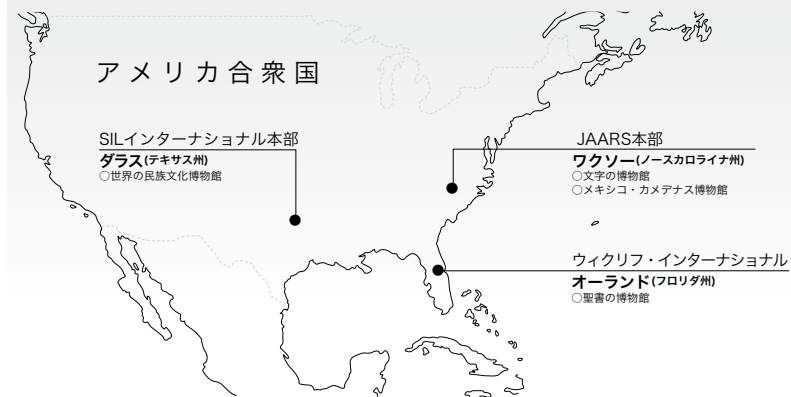
いろいろな言語の発音を記述するのに使われる国際音声字母（IPA International Phonetic Alphabet）。SILがウェブ上で提供するフォントをつかえば、コンピュータ上で簡単に扱うことができる。辞書をつく

技術協力をする同じくNPO団体JAARSである。

JAARSは、翻訳活動に必要な技術サポートを行う団体で、もとの名であるJungle Aviation and Radio Service（未開発地航空通信事業部）が示すように、小型航空機による輸送と通信技術の提供からはじまった。たとえば、一九六〇年代のフィリピン。山を越え谷をわたって目的の村にたどりつくところから話が始まり、やがて滑走路をつくるための交渉をはじめ。ところが最初の候補地では、交渉中に喉が腫れあがって高熱を出し都市部までかつぎだされるはめに。村人たちによると、「所

SILインターナショナル 夏期講座から世界の言語研究へ

世界のどの地域へ現地調査に行っても、その名を耳にせずにはすまない団体がある。SIL（エス・アイ・エル）インターナショナル、もとの名を「夏期言語学講座」。世界各地に散らばるSILメンバーからの情報と彼らを支える技術は、大学を拠点とする研究者にとっても欠かせない存在となっている



るなら、ツールボックス（toolbox）。テキストを入力したファイルと連動させると、自動的に単語ひとつひとつに訳をつけてくれる機能もある。こちらもSILのサイトから無料でダウンロードできる。世界のどこでどんな言語が話されており、話者がどれくらいいるのかを知りたいときに参照する『エスノローグ』（Ethnologue）もSILの編集だ。

有者のなかに土地を手放すのを嫌がる者があり、呪文をかけられてしまった」。第二候補地には聖なる松の木が何本かあったが、こちらは現地の習慣に従って神々に豚を献呈することで無事終了。晴れて飛行機が往来することになり、無線とあわせて有事の折にはすみやかに外部と連絡をとることができるようになった。時代がすすむにつれ、必要とされる技術もコンピュータのプログラミングや現地でのメンテナンスなどを含み多様になった。現在、JAARSの本部はノースカロライナ州に位置しており、翻訳者が技術サポートや研修を受けるための宿泊施設や、

約四年ごとに発行されるが、最新版には、地域と国ごとに整理された六九〇九言語、現地名や方言名などを含めると、なんと四万一一八六言語についての情報が記載されている。こちらもウェブ版なら誰でも閲覧できる。そう、SILは、NPO（非営利団体）なのだ。「夏期講習」はそもそも、世界のすべての人びと、とくに書記法をもた

「文字の博物館」、「博物館」などもある。敷地内に小型飛行機が離発着するための滑走路があることはいうまでもない。

研究と、現地の人びと

日本に住んでいる私たちは、文字があつて読み書きを習得することを当たり前のように感じている。ところが、世界には歴史や知識を、書くという手段ではなく口承により伝承してきた民族も多い。文字を知っている、それは公用語や話者の多い言語を書くための手段であることが多く、イコール自分の言語が書けるということではない。

SILは聖書の翻訳を通して、少数民族の言語や文化に貢献することを目的とする。そのために翻訳者は、研究者の現地調査同様、現地の人びとのなかで暮らし、言葉や文化を学んで分析し、その言語に合う正書法を確立する。言語学者であれば、ここからさらに学問的な言語の分析を続けることになるが、SILのメンバーは、聖書の翻訳をすすめると同時に現地の人びとに読み書きを教えることとなる。また以前であれば、希望する者は医療技術の研修を受け

菊澤 律子

きくさわ りつこ
民博 先端人類科学研究部
専門は、主としてオーストロネシア諸語を対象とする歴史（比較）言語学や記述言語学的研究、文法変化に関する理論研究、言語からみたオセアニアの先史研究など。

信念とそれを支える団体

今でこそ、少数民族言語の記述の必要性が世界中で謳われているが、少し前までは、話者数が限られているような言語の文法書を書くことについての価値があるのかを一般の人に説得するのはとても難しかった。そんな時代からコッコツと翻訳を進めてきたSILの活動を支えてきたのは、「聖書の言葉を世界の人に届けたい」という思いと、そのため

することもでき、現地の人々の治療も行った。フィールドワークの成果をどのようにに現地社会に還元するのか、は、言語学者に限らず現地調査をするもの共通の課題である。SILの経験に学ぶものもありそうだ。一方、近年では、SILのメンバーが大学の博士課程で言語学の学位をとったり、国際学会で研究発表をすることも珍しくなくなった。

なお、SILの翻訳者は、団体内ではリングゲイスト（linguist、言語の専門家）と呼ばれ宣教活動は行わない。これは、宗教や信条の異なる世界各地で識字教育に携わるために必須の条件であることは想像に難くない。宣教活動は姉妹団体であるウィクリフ・インターナショナルの担当となる。

フロリダ州にあるそのウィクリフのデイスカバリー・センター、通称「聖書の博物館」によると、聖書の完成版がある言語は現在四二九、部分訳が一九九九。残りの約四五〇〇言語はまだなにもない。それらの言語を話す人びとに自分たちが信じるものを届けたい、という思いが続く限り、SILインターナショナルの任務は続く。

そしてこの夏も、ノース・ダコタ大学でSILの講師陣を中心とした「夏期講習」が開催されている。

識字教育は大切な使命のひとつ。
（フィリピン・ルソン島北部ポントックにて。Lawrence A. Reid 提供）



「いちごろう」を食べるブタ

タイ北部に暮らすモン族の人たちが毎日のブタのエサのために流す汗は、たいいてではない。バナナの青い葉を選んで刻んで与えるようすは、さながら新鮮なサラダを用意するようすでもある。そしてトウモロコシは料理のように石臼で粉に挽いて煮込む。家畜と人が「屋根の下で暮らしていたかつての日本の農村を想起させる。

タイの北部の山村で暮らしている
と、明け方、トントントントンと何かを刻むような音が、各家から聞こえてくる。この音の正体はなんだろう



タイ北部の山村の調査地でみられたブタの母子

うか。それはブタに与えるエサを準備するためのもので、毎朝暗いうちから、何かを刻む音が聞こえてくる。

タイ北部の少数民族の暮らしのなかで

私がこれまで調査を行ってきた、タイ北部の山村では、ブタがとても重要な家畜となっている。そこではほとんどの家にブタ小屋があり、それぞれ数頭のブタを飼育している。そして育てたブタは儀礼での供犠の際に屠殺され、親族で共食される。このように、近代化された養豚業ではない、人とブタの関係が現在まで継続して存在している。この村で生活をするならブタを飼うのはあたり前なのだ。

私はこのような山村での調査にあたり、ブタに与えるエサにさまざまな自然資源由来のものが利用されていることに注目してきた。

ブタのエサに注目すると

ここで、ブタのエサを用意する、ある朝のひとこまをみてみよう。タイ北部はナーン県、標高七〇〇メートルの山中に位置する人口六〇〇ほどのモン族の山村での、二〇〇五年九月のこと。

明け方、眠い目をこすりながら起きて下宿先のとりの家を訪ねると、その家の娘さんが土間でバナナの葉を刻んでいる。気温は二〇度を少し下回っているだろうが、長袖のシャツ一枚では少し寒い。

私は土間で焚かれている火のそばに座りながら様子を見ていた。娘さんはバナナの葉を刻み終わると、次はバナナの茎を取り出した。トントントントンと、大きなまな板の上で刻んでゆく。一〇分は刻んだだろうが、それが終わると、ちり取りカゴの中にあつたウリの皮の食べ層を取

なかい しんすけ
中井 信介
民博 外来研究員
専門は環境人類学。農耕民の家畜飼育文化が歴史的にどのように変化してきたのか、またその変化の背景について興味をもっている。現在、とくにブタの飼育文化に注目してタイ北部のモン(ミャオ)族の事例から研究を行っている。



祖先祭祀で供犠されるブタ

り出し、それも刻んでゆく。ビニールシートの上は刻んだもので山盛りになっている。

ようやく十分な量を刻み終えた様子で、刻んだものをバケツに入れた。そして家の奥からなにやら袋を取り出してきた。米ぬかだ。ヒョウタン

られ、茎が主に利用されるようになった。

なぜ、このような変化が起きるのだろうか。ひとつは、乾季になると青々としたバナナの若い新葉が少なくなるのが考えられる。もうひとつは、乾季になると積極的にバナナの樹を根元から切り倒して、茎の部位をブタのエサに使うこととしていえることが考えられる。

この背景には、茎をブタのエサに使うことができることに加えて、次の雨季に向けて切り株の周辺から新しい芽が出るのを促していることもありそう。

村人がブタのエサに使うバナナの葉に気を配っていることは「ブタは青い葉を好んで食べる。黄色くなった(枯れた)葉はおいしくないから」という言葉からも窺える。まるで、ブタのために新鮮なサラダを用意しているようでもある。

このように、タイ北部の山村で、ブタのエサの具体的な内容とそれを準備する村人の行為を注意深くみてゆくと、ブタはずいぶん手間暇をかけた「いちごろう」を、しかも季節により変化させるメニューの「いちごろう」を食べ

森にある焼畑の畑に行けば、その脇には野生のものから栽培されているものまで、多くのバナナの樹がある。村人は毎日のように畑仕事に出掛け、帰り際にこのバナナの葉と茎を竹カゴいっぱい採取する。夕暮れ時には、畑仕事で疲労困憊した体で、さらにブタのために重いカゴを背負い、畑から村へ帰る坂道を、ふうふう言いながらゆっくりと登ってくる村人の姿がよくみられる。

このように、モン族の人々が毎日のブタのエサのために流す汗の量はたいへんなものになっている。

季節の「いちごろう」をけつこう食べている

ところで先にみた、ある朝のひとこまではブタのエサにトウモロコシは与えられていない。しかし、一〇月を過ぎて雨季が終わる乾季に入ると、ブタにも盛んに与えられはじめ

町へ運んで販売することで、主な現金収入を得ているが、その一部がブタのエサに回されている。村人がトウモロコシをブタに与える時には石臼で粉に挽いて、さらに大きな釜で煮込んでから与える。このトウモロコシを煮込んだものを人が食べることはなく、かなり手間をかけたブタのための料理となっている。乾季がすすみ、翌年の一月頃になると、ブタの主なエサとなっているバナナの葉と茎の利用にも変化がみ



背負いカゴいっぱいにバナナの葉を採取して家へもちかえる

ブタのエサは木をくり抜いた容器にいれられている

エサとして与えられるトウモロコシとカブがかまどで煮込まれている



編集後記

5月、関西では、新型インフルエンザという大嵐が吹き荒れた。神戸で初患者が出たかと思うと、またたく間に関西一円にひろがった。民博も周囲の学校にならい、いち早く休館の措置をとった。長い休校をよこごび、新型インフルエンザに親しみをこめて「ブタかぜ」とよんだ子どもたちがいる反面、さまざまな問題も引き起こした。

民博でも終盤を迎えていた特別展や共同研究会が中止となるなど影響は大きく、市民の方がたにもご迷惑をおかけした。特別展は期間延長で予想以上の来館者を迎えることができたが、今も影響は残っている。

大嵐の去ったあとの関西人の反応も素早かった。休校や休館がいっせいに解除された朝、前日には咳をするものはばかられた通勤・通学列車からマスクは消え、何ごともなくあったかのような日常が戻っていたのである。

今の特集は旅する神がみ。移動という点で新型インフルエンザとひっかけようとしたのだが、「不謹慎」といわれそうでした。(庄司博史)

次号の予告

特別展「自然のこえ 命のかたち」

月刊みんぱく

2009年8月号

第33巻第8号通巻第383号 2009年8月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 西尾哲夫

編集委員 久保正敏(編集長) 佐々木史郎 庄司博史
中牧弘允 信田敏宏 山中由里子

協力 財団法人 千里文化財団

制作 京都通信社

印刷 市蔵図書

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

●予定時間 14時30分から15時30分(予定)。

●常設展示場観覧料が必要です。

*都合により、予定を変更することもあります。

国立民族学博物館(みんぱく)の研究者が、来館された皆様の前に登場します!

「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別!

どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしています。

8月の開催

8月2日(日)

話者: 樫永真佐夫 (民族社会研究部准教授)

話題: ベトナム西北地方の黒タイの家

場所: 展示場内休憩所

8月9日(日)

話者: 野林厚志

(文化資源研究センター准教授)

話題: 百年來の凝視

場所: 中国地域の文化展示



「亀の甲」型家屋の解体

8月16日(日)

話者: 日高真吾 (文化資源研究センター准教授)

話題: 被災文化財を修復する

場所: 企画展示場B

8月23日(日)

話者: 吉田憲司 (文化資源研究センター教授)

話題: 新しいアフリカ展示が出来るまで

場所: アフリカ展示

8月30日(日)

話者: 齋藤 晃 (先端人類科学研究部准教授)

話題: アマゾンで暮らす

場所: 常設展示場入口



交通案内

●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分

●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。

●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてできます。

●みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

